

「紙の道(ペーパーロード)」でも結ばれていた東アジアの国々。 その文化的交流も修復するシンポジウムを開催。

日本やアジア地域には、紙や絹を素材として作られた文化財が多い。これらの文化財を修復する技術を持つ人々を装こう師という。いわば紙文化の守り手である。有限責任中間法人 国宝修理装こう師連盟は、国内のみならず他のアジア地域と連携を図り、その技術と文化財を保護していくため「東アジア紙文化財保存修復シンポジウム」を開催した。

千年以上も前の紙の質や、漉き方、染料などさまざまな知識がなければ文化財修復はできない。

「装こう」。「こう」の字はサンズイに「黄」の異体字である。染めるという意味だ。一般的にはなじみが少ないが、その歴史は古く、平安時代の延喜式神名帳などにも記されている。「経典」などの染色や紙継ぎ、断裁などが主な仕事であったようだ。一方、関西では「表具師」、関東では「経師」と呼ばれる職業がある。こちらは掛物、巻物、書画帖、屏風、襖などの製作をなりわいとしている。

「私たちは、紙、布、糊、漆を使用した文化財の制作や修復を行う職人を総称して『装こう師』と定義づけています」と国宝修理装こう師連盟理事長の岡岩太郎さんは語る。

連盟の設立は1959年。当時指定文化財を修復していた7工房(現在10工房)が集まった。その後、1997年には文化庁選定保存技術保存団体として認定を受けた。

絵画や大量の古文書・経巻類等の員数が多いものは、単独工房で行えば修理に時間がかかるが、同連盟では各工房同士の共同設計・施工ができるため、時間を短縮するとともに、それぞれ得意とする部分を分担し、技術を共有し合えるのできばえもよくなる。これによって、それまで秘伝とされていたような事柄も徐々にオープンなものになったのである。これまでに、「平家納経33巻」「法然上人絵伝48巻」「明月記(自筆本)」などの国宝や重要文化財を手がけている。



国宝修理装こう師連盟主催の初級講習会の様子

文化財の修復というのはそう簡単なものではない。パソコンの修理であれば、新品の部品に取り換えて作動すればお客さまも喜ぶだろう。しかし、文化財の修復は『良くなるものも、改まるものもない』と言われている。新しくなってしまうたら、それは誤りであり、あくまでも現状を維持できるように考えるべきだという。また、過去に誤った修復がなされている場合もある。この場合は、本来の正しい原装に戻さなくてはならない。そうすると、時代的な知識が必要になってくる。原料、漉き方、染料などを考えていくとノウハウは無限にあるのである。

その国の文化財はその国の手法で修復する。
シンポジウムが協力意識と相互理解を促した。

こうした技術を学究し保存することを目的として、連盟では毎年定期研修会を行っている。

「第10回目の定期研修会は韓国や中国からも招きました。そこで、これはもっと現場の職人たちが集まって情報交換をする必要があると判断したのです」(岡岩太郎さん)

それがきっかけで始まったのが「東アジア紙文化財保存修復シンポジウム」だ。今回の助成の対象となった第2回目は九州国立博物館との共催によって2007年9月7日、



シンポジウムには中国、韓国からも多くの学者と技術者が集まった

8日に福岡県で開催された。中国、韓国からも数多くの識者と技術者が集まった。

紙はもともと中国で製紙法が確立され、朝鮮半島を通過して日本に伝わった。岡さんは「絹の道ならぬ、紙の道もあったわけです。その後、各地の気候風土によって技術や文化が枝分かれしていったのです。この東アジアのさまざまな紙の文化を学び合い、協力して保存していくという意識が高まりました。このシンポジウムはたいへん有意義で、多くの成果を残したと思います」と語る。

一例をあげれば、日本の紙はコウゾを主成分としているが、中国の紙はたん皮(たんひ)が主成分だ。高温多湿の日本と、比較的乾燥している中国という季候の差がそこにある。

「後者はやや水に弱いですから、日本と同じ裏打方法ではうまくいきません。中国では本紙に糊をつけ、紙を合わせていく方法をとる。なかなか理にかなっていると思いま



シンポジウムのパンフレット

すね」と同連盟専務理事の坂田雅之さんは説明してくれた。

こうした違いをお互いに尊重し合いながらも、お互いの技術を学び研鑽を積んでいくという意識もこのシンポジウムで生まれた。今日本では多くの中国の学生が技術を学び、本国に帰って活躍している。連盟の取り組みは、文化財だけでなく、東アジアの文化的交流の修復にも貢献していると言えそうだ。

●担当者より

文化交流の重要性をご理解いただき心より感謝いたします。



国宝修理装こう師連盟
理事長
岡岩太郎さん



国宝修理装こう師連盟
専務理事
坂田雅之さん

おかげさまで今回のシンポジウムでは中国からも、韓国からも20名以上の方々をお招きできました。文化は文化にとどまらず、経済、社会さまざまな分野に反映することを正しくご理解いただき心から感謝しております。これからもお互いの違いを個性として尊重しながら、東アジアの紙文化保護のお手伝いをしていきたいと考えています。